

〔特集〕長谷川伸没後60年

# 命が吹き込まれた番場の忠太郎

## 鳴海風



忠太郎の銅像除幕式（番場宿の石碑横）

滋賀県米原市番場の浄土宗本山蓮華寺の境内に忠太郎地蔵尊がある。忠太郎とは、長谷川伸先生の戯曲『「瞼の母」』の主人公、忠太郎のことだ。博徒だが、五歳のときに生き別れた母恋しさを胸に、旅の空の下を生きている。作品の中では、中山道番場宿の生まれに設定されている。番場の忠太郎は、架空の人物だ。

新鷹会の勉強会に入れてもらった今から三十年以上前、先輩から番場の蓮華寺に忠太郎地蔵尊があると聞いた気がする。しかし、プロデビューを目指して一心不乱に小説を書いていた私には、どうでもいい情報だった。

女優の五大路子さんから「忠太郎地蔵まつりに行きませんか」とお誘いを受けたのは八年前だ。昔の記憶がよみがえった。地元の子どもたちに朗読劇『瞼の母』をやることも聞いたので、私は単身、マイカーで出かけることにした。横浜から行

かれる五大さんに比べれば、愛知県在住の私は近いし、蓮華寺ならマイカーが便利である。

名神高速の米原インターをおりて、忠太郎食堂（既に廃業）という大きな立て看板を右に見ながら交差点を左におれる。少し走ると、中山道番場宿の石碑がある交差点だ。本陣跡、脇本陣跡、問屋場跡もすぐ近くだ。そこを左に曲がった道が旧中山道である。二百メートルほどで、蓮華寺の参道入口だった。



忠太郎食堂立て看板

この地蔵尊は、先生と地元の人たちによつて建立された。生前のことで、先生はここへ来られているし、本堂の壁の寄付者名簿の中には、長谷川伸という名札もある。

忠太郎地蔵尊の法要は、石段下に張られた白いテントで挙行された。

五大路子さんは、番場史跡顕彰会が米原駅まで迎えに行つて到着していた。挨拶を交わし、私は近くの席に着座した。読経のあと、地元の子どもたちの献花・参拝があった。続けて、私たちは焼香した。

過疎化で檀家が十二軒に減少している蓮華寺の貫主は、山形県天童市の浄土宗佛向寺の井澤住職が務めている。貫主の話があった。

「最近よく、親が子のあるいは子が親を殺す事件が起きるが、親子の情愛があれだけつして起き得ないことだ。忠太郎地蔵尊はその親子の絆の大切さを教えていて、こういう時代にこそ守っていかねければならない」

五大さんの朗読劇は、本堂内でおこなわれた。私は故森直樹氏（穂積鷲先生）の長男）からもらった長谷川伸先生の写真を持参したので、それが祭壇前に飾られ、五大さんが先生の紹介をするときに

使われた。

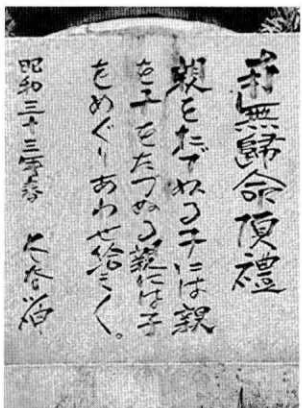
長谷川伸先生の写真は、番場史跡顕彰会の泉会長に、複製を作ってもらうため提供して帰った。

こうして毎年七月に開催される忠太郎地蔵まつりに五大さんと参加しているうちに、泉会長や井澤貫主との交流は深まった。山折哲雄先生も参加された。ところが、新型コロナウイルス蔓延のため、まつりは中断した。

忠太郎地蔵まつりが再開できない昨年（二〇二二年）六月、泉会長から思いがけない手紙が届いた。忠太郎食堂が解体された後、行方が分からなくなっていた食堂のシンボル番場の忠太郎の銅像が八年ぶりに見つかったという。番場に戻りたいし、台座も作りたいので、その資金集めのためのクラウドファンディングに協力してほしいという内容だった。

私は銅像の建立・除幕式の出席権を得る形で寄付に応じた。さらに、自身のフェイスブックでも、このプロジェクトを紹介した。

クラウドファンディングだけでなく、米原市のふるさと納税の返礼品に加えてもらうなど熱心に資金集めを続け、昨年未までに目標額を達成し、今年（二〇二三年）三月十八日の除幕式の招待状が届



忠太郎地蔵尊の台座の文章

蓮華寺は聖徳太子の開基と伝えられるから、飛鳥時代からある寺だ。国の重要文化財『陸波羅南北過去帳』（紙本墨書）がある。一三三三年、足利尊氏に攻められた六波羅探題北方の北条仲時が、落ちのびていく途中、この寺で一族郎党四三十余名と自刃した。この過去帳は時の住職が作った死んだ彼らのものである。境内に供養塔もある。

初めて見た忠太郎地蔵尊は、本堂の裏手の山の斜面、石段の上に、赤いよだれかけをつけて立っていた。その台座には、「南無歸命・頂禮

親をたづぬる子には親

を子をたづぬる親には子

をめぐりあわせ給え く（繰り返し）。

昭和三十三年春 長谷川伸

と長谷川伸先生の筆跡で彫られている。



蓮華寺本堂の写真

いた。

小雨がばらつくあいにくの天気の中、私は久しぶりにマイカーで蓮華寺を訪れた。

銅像は、中山道番場宿の石碑のすぐそばに設置されたが、式典は蓮華寺の研修道場で始まった。『瞼の母』関連の展示もあった。五大路子さんや山折哲雄先生からは、お祝いのメッセージが届いていた、式の中で紹介された。

泉会長は挨拶の終わりの方では、今年が長谷川伸先生の没後六十周年にあたることに触れていた。そして、その記念の年に銅像が番場に戻って来たことはうれしいし、忠太郎地蔵まつりも七月に四年ぶりに再開できそうなので、合わせて何か記念になるイベントを考えたいと結んでいた。

その言葉から、私も久しぶりに東京都品川区大崎の真言宗高福院にある長谷川伸先生の墓参をしようと思った。帰宅してすぐ五大路子さんに電話し、除幕式の様子を報告してから「また（長谷川伸先生が亡くなられた）六月に一緒に先生のお墓参りをしませんか」とお誘いした。十年來の知り合いである川島住職に墓前で読経してもらうつもりだとも言った。五大さんはすぐ賛同してくれた。

一方、新鷹会では、没後六十周年の法要が検討されていた。また、港区白金台二本榎の先生のお屋敷の解体・売却や、蔵書類の保存も検討中だった。結局、お屋敷の最後の見学会を含めて一緒にやることになった。

六月十六日、長谷川伸先生没後六十周年の法要が、高福院の本堂で、川島住職の朗々とした読経の中で営まれた。住職

泉会長から、銅像発見の経緯が説明された。忠太郎食堂の経営者（故人）から食堂解体時に銅像を購入したのは、長浜市在住の男性だった。シルバーさんの集まりの中で、会長の知人が偶然そのことを知ったのだという。電話で知らせを受けた翌日には、会長はその男性と会い、番場の文化財として長く守っていきたいので譲ってほしいと懇願した。男性は忠太郎食堂を長年利用していた人で、銅像にも愛着を持っていたが、了承してくれた。

平尾米原市長の祝辞が印象に残った。若いころから市役所への通勤途中に忠太郎食堂と銅像があり、それは特別な存在ではなかった。それが、いつのまにか、食堂は営業をやめ、銅像もなくなった。立て看板だけが残った。市役所とは関係ないことだった。

『瞼の母』は映画にもなったが、大衆演劇として舞台で多く演じられた。番場の忠太郎は架空の人物だ。その銅像がなくたって、それは日常の風景が変わっただけだった。

ところが、番場の人たちは行方を捜していた。そして、人と人の偶然の出会いが、八年ぶりの発見となった。見つかったから、所有者を説得し、買い戻して



没後60年法要を終えて（高福院）

は法話の中で高福院の縁起も語ってくれた。もともとは高野山金剛峰寺の塔頭の一つとして誕生し、寛永年間（一六二四—一六四四）に当地で高福院として開創された。本堂は、天保年間（一八三二—一八四五）に老中水野忠邦の屋敷から移築したもので、関東大震災や今次大戦にも耐えて今日にいたっているという。

後日、私はお礼の気持ちをこめて、十返舎一九の『金の草鞋東都大師巡八十八箇所』を古書店で入手し高福院へ寄贈した。この古文書の中で高福院は、御府内八十八箇所霊場の第四番札所として紹介されているからだ。

運搬し台座まで製作する費用の工面、設置すべき場所の選定から除幕式までの準備と、わずか一年でこの日を迎えたことに、正直驚いている。元は大衆演劇のお芝居の登場人物ではないか。何が関係者をここまで突き動かしていたのだろう。

市長はすなおに不思議がって見せたが、『瞼の母』が多くの（特に番場の）人々を感動させ親子の絆の大切さを教えていたからだ、と言いたかったのは間違いない。

除幕式は、設置場所へ移動しておこなわれた。雨はすっかり上がっていた。報道関係者が撮影する中、銅像をおおっていた白い布が除かれると、台座の上に立ち、三度笠を少し持ち上げてしっかりと前を見つめる忠太郎が現れた。博徒に身をやつていても、母との再会を想う気持ちがあふれている。



忠太郎の銅像前で  
（左：泉会長と右：鳴海風）

この日私は、五大路子さんだけでなく、新鷹会の許可を得て、新鷹会ゆかりの塩原温泉和泉屋旅館（既に閉館）の生まれで元NHK勤務の山路家子さんと、長谷川伸の研究を続けられている、都留文科大学名誉教授の鳥居明雄先生にも声をかけていた。

法要に続いて、二本榎のお屋敷の見学会があった。山路さんは探していた長谷川伸先生がNHKに出演された貴重な録画フィルムを発見した。また、鳥居先生は、長谷川伸先生の膨大な蔵書類を見て、寄贈・保存先として先生の生誕地でもある横浜の近代文学館を提案してくれ、五大さんも賛成だった。

実はこの時、七月二十三日の忠太郎地蔵まつりの併設イベントは、全国忠太郎歌合戦と決まっていた。

私は番場史跡顕彰会の泉会長に審査員として、新鷹会の松岡弘一理事長を推薦していた。なぜなら松岡理事長は、二〇一九年に、氷川きよしの『最上の船頭』で第五十二回日本作詞大賞を受賞した作詞家でもあったからだ。泉会長からは松岡理事長を審査員長として受け入れたいと回答があったので、松岡理事長に審査員長就任を依頼し了解を得た。

私はまたフェイスブックで、この初め



忠太郎歌合戦を終えて



松岡理事長の熱唱

ての試みである全国忠太郎歌合戦を紹介した。

七月二十三日、蓮華寺に、松岡理事長が初めて訪れ、長谷川伸先生の足跡を見てもらった。新鷹会の理事長が蓮華寺を訪れたことは意義深い。

四年ぶりに開催された忠太郎地蔵尊の法要に松岡理事長、五大路子さんと一緒に参列したあと、午後から全国忠太郎歌合戦になった。五大路子さんはとうぜん審査員で、不肖私も審査員の末席を汚すことになっていたので、せめて盛り上げようと、直前に浴衣に着替え、角帯を貝の口に結び、番場史跡顕彰会製作の団扇を持って審査員席についた。

歌合戦の曲目は、中村美津子の「瞼の母」や三波春夫の「忠太郎月夜」が多かったが、カラオケ自慢が集まっただけあって、なかなか聞きごたえがあった。司会者が質問すると、やはり新型コロナのため、大勢の前でマイクを握ったのは久しぶりだったとのこと。

審査会議の前に、松岡理事長は、作詞した新作、松尾雄史の「信州追分政五郎」を自身ののどで披露し、満場の拍手を受けた。

後進の育成に注力された長谷川伸先生は、弟子たちに、プロだから売文のための著作は仕方ないが、できれば著作の1割か2割は、書いて残すべき作品を書きなさいと言われたという。先生ご自身の書くべき作品とは、実在の人物の残すべき記録で、それは先生は紙碑と呼んだ。番場の忠太郎は実在の人物ではない。「瞼の母」執筆当時、生き別れた母に対する狂おしいほどの思慕の念を抱いていた先生は、忠太郎に自らを投影したのではないかとすれば、忠太郎は長谷川伸



番場史跡顕彰会のお二人

番場の忠太郎は、一九三〇年に発表された戯曲『瞼の母』の主人公で架空の人物である。

長谷川伸先生の没後六十周年の今年、八年間行方不明だった忠太郎の銅像が、発見されてからわずか一年後に、米原市番場に戻って建立・除幕式がおこなわれた。没後六十周年の法要が、品川区大崎の高福院で、新鷹会主催によりおごそかに営まれた。新型コロナで中断していた忠太郎地蔵まつりが再開され、没後六十周年を記念する全国忠太郎歌合戦が開催された。歌合戦の審査員長として松岡理事長が出席された。

先生ご本人である。

番場の忠太郎は、多くの人々の心に残った。残るべき人として残った。忠太郎が長谷川伸先生そのものだったとするなら、『瞼の母』はまさに紙碑である。

長谷川伸先生没後六十周年の今年、二〇二三年、いくつもの忘れがたい出来事が続いたのは、紙碑『瞼の母』の持つ力に違いない。

番場の忠太郎は、命が吹き込まれ、実在の人物となっていたのである。



除幕式での展示